日本インターネットガバナンス会議(IGCJ)

第 9 回日本インターネットガバナンス会議(IGCJ)レポート

2015 年 10 月 28 日

1. 会合の概要について

- 日時： 2015 年 9 月 29 日(火) 18:00～20:00
- 会場： JPNIC 会議室
- URL： http://igcj.jp/meetings/2015/0929/

1.1. 参加状況

- 会場参加者数： 21 名
- 中継視聴者数（ユニーク視聴数）： 14 名

1.2. アジェンダ（発表者敬称略、所属は当時）

1. 環太平洋大学協会(Association of Pacific Rim Universities, APRU)および APRU Summer Seminar 2015 について
   慶應義塾大学国際インターネット政策研究会(KICIS)エグゼクティブディレクター／政策・メディア研究科 特別招聘教授 ジム フォスター
   資料
2. ITU CWG-Internet オープンコンサルテーションへの対応について
   日本インターネットエクスチェンジ株式会社 代表取締役 石田 慶樹
   資料
3. IGF 2015 の紹介
   一般社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター 奥谷 泉
   資料
4. IANA 監督権限移管に関する統合提案への意見提出活動の振り返り
   IANA 監督権限移管提出意見検討チーム 橘 俊男
   資料：IANA 監督権限移管に関する動向
   資料：IANA 監督権限移管に関する統合提案への意見提出活動の振り返り
5. IDN TLD 文字列のルール策定活動について
   株式会社日本レジストリサービス 取締役 堀田 博文
   資料

2. 質疑応答・議論内容

2.1. 環太平洋大学協会(Association of Pacific Rim Universities, APRU)および APRU Summer Seminar 2015 について

Q. 結論の中には提言のようなものも書いてあったが、この活動の母体はあるのかというか、提言を出す主体は誰になるのか？また、どこに結果を持って行くのか。

A. 実を言うと、今月初めに APEC に持っていったプレゼンはもう少し含みのあるものだった。APEC では Steering Committee を作っており、行動計画も策定中で、そこで活用してもらえると思う。

Q. APRU の夏期講座においてディスカッションの時間を取ったりされているが、この中には学生がどの程度参加しているのか？

A. 慶應の研究会の中で学生が幾人もいて、サポートスタッフとして 6 人参加している。今回は学生が参加したのは見学だけだったが、来年は 10 人か 20 人程度の学生を取り込みたいと考えている。

C. 行政官 15 名のうちの 1 人として参加した。フォスター先生の方針だと思うが、この会合では資料を使わず口頭のディスカッションを重視していて、インタラクティブなやり取りが続いてハードではあるが、魅力的な会合だったと思う。ただ、結論のところについては、多くの議論で集約するとこうなるということだと思うが、セミナー参加者の中でコンセンサスを得たというものではないと思う。

あと、次回以降のセミナーの方向性の一つとして、ペーパーワークを取り入れて、成果文書を作るという活動もあると思う。行政官的な立場からすると、行政官の性質として文書があると真剣に取り上げると思うので、その方が盛り上がるとは思う。

A. APEC でプレゼンした時は、条件付きだった。この会議についてのレポートを明日か明後日までには出す予定。言うまでもないが、指摘はその通り。今回は 6 日間の日程で、自由自在に話した。レポートを読めばわかるが、特定のものを除いて、原則として誰がどう発言したという名前は出していない。

あと、結論という日本語はやや強いのかもしれない。英語の直訳は conclusions であったが、observations としてもよかったかもしれない。今のどういう制度がダメとか、結論としてまでは言っていない。ただ、現在のプライバシーの面などの制度について、技術に既に先を越されたので、みんなが納得できるような自己責任に基づくシステムを作らないといけないというのは結論として、参加者の共通認識になったと、そう言っても過言ではないと思う。

2.2. ITU CWG-Internet オープンコンサルテーションへの対応について

C. 全体の雰囲気として、ITU が IX を自分たちの場として利用するのではないかと、そこを警戒する気持ちが利用者側として大きく感じさせるものだった。あと、IX のメカニズムを良く理解されていないこともあるのではないか。そういった、議論の前の部分がきちんとしていないのではないかとも思った。

C. 今回は各自、いろいろな人がいろいろなコメントを出していた。今回は特に決議などは出ないが、今後どこかの会議で一気に動きが出るという可能性もあるので、引き続き注視が必要。

C. 補足だが、ITU の CWG-Internet 会合に参加されているお二人に、無茶振りしてライブで遠隔参加してもらっている。ホットな内容に感謝。

2.3. IGF 2015 の紹介

Q. IGF の目的が意見を出し合い情報共有をすることだと言っていながら、最初の大きな問題点として、10 年間やってきたのにアウトプットがないとなっている。これとアウトプットを出すようにして社会にフィードバックしたいというのは相反している気がするが、どうなのか。

A. その辺のバランスはまだ手探りのところがある。やり過ぎると IGF で何かを決めることになってしまうし、それは IGF の位置付けとは異なってしまう。かといって、ここで何も成果が出ないのであれば、そもそも参加する意味がない。なので、今こういうことをやっていますと書き留めるとか、メインセッションの議論のまとめとか、そういうものを作る程度であれば、IGF が何か決定する場とか交渉の場にはならないのではないかということで、今はそういう取り組みを進めている。

2.4. IANA 監督権限移管に関する統合提案への意見提出活動の振り返り

C. 提案者の一人だが、いきなり「どうですか？」ではなく、アドホック会合に出た人の感想を聞くところから始めると、みなさん話しやすいのではないかと思う。

Q. 9 月 1 日（に開催された IANA 監督権限移管に関する IGCJ アドホック会議）に来て、始めて IGCJ に参加した。感想としてはダイナミックだなと。こういう形で進めるのは、個人的には面白いし良かったと思う。

ただ、9 月 1 日の会合の告知も直前だったし、コメントも募集をかけてから締め切りまで 1 週間なかったが、それは意図的なものだったのか？

A. まずは締切ありきで、それに基づいて最低限の期間を確保したらあのようになった。

C. 会合でも意見を言ったが、せっかくなのでプロモーションなども踏まえて、コミュニティへの伝え方や議論の仕方など、時間は色々考えられたらなと思う。

A. 反省点というか、こうすればよかったということとして、パブコメの期間は予測されていたので、それを見越してこの活動を始めていれば良かったのかなと思った。今さらながらだが。

C. 私も 9 月 1 日の会議に参加したが、非常にフレキシブルでダイナミックで良いなと思った。それらを当面は大事にするのが良いのではないかと。活動の結果出てきたものを記録して、そして公開するのは非常に良い。議論の過程がこうあったと、これを見えるような形でコミュニティに公開するというのは、他の国はやっていないし凄く良い。他のイシューについても、出来るようならこういう形でケースを積み上げて、それが IGCJ の実績になると良いと思う。プラットフォームの自己評価はまだ難しいので、そういう成果を見て、外部の人が評価するのがまずは良いのかなと思う。ICANN でもこの活動は評価されているし、海外にも積極的に紹介していきたいと思っている。これかも頑張っていただきたい。

A. 評価は自分がするものではなく、他人がするものだと思う。そして、そのためにはこのような実績を積み上げていくことが重要だと感じた。

C. 深さと分かりやすさのバランスについて、皆さんを巻き込んでいくことで、皆さんの理解も深められる。そういう意味では今回のはまずまずの出来だと思っている。みなさんがお持ちのもので IGCJ に持ち込んでみたいものがあれば、是非ともこのプラットフォームを使っていただきたい。

C. 今後他の課題についてもこのプロセスを参考にしながらというのがあればとといことでは、少し前の IGCJ で、みんなが抱えている課題や情報を共有して取りまとめようという話があったと思う。例えば IX とか WSIS とか、色んな情報を収集して、検討していければ面白いと思う。

A. パンドラの箱とまでは言わないが、世の中にはパブコメが山ほどある。その中で取捨選択をして、意見をするのは重要。ただ、一方でそれを作るのは凄く手間だともわかった。プラットフォームを使う、ここに集うみなさまと、取り組んでいくことが出来ればと思う。

Q. 今回のやつはワールドワイドなお話。国内でも通信事業に関わるようなものは結構パブコメがかかっている。この IGCJ の活動領域を考えた時に、国内でのパブコメの募集に対して、何らかのアクションを行うのはここのフォーカスに入っていたりするのか。

A. そう思う人がそう言って手を挙げていただければと思う。ここはプラットフォームなので。

C. マルチテークホルダーで進めて行こうというのが、インターネットガバナンスの方向性だと思うが、フォスター先生の発表のように、四つのステークホルダーがあるということは、四つの団体があるということ。つまり四つの立場がある。その中で IGCJ はどれなのか。活動した時に、どの立場でも無いコンセンサスとかが出てくるのであれば、それは四つの立場の中の和しか出てこない。そういうことなのか、それとも四つの中で言えないような、そういう意見を吸い上げて、五つ目の立場で意見を出すのか。前者だと総論をまとめるだけ、後者だと四つの意見のどれも納

得できないと言える。何らかのポジションニングを決めるのか決めないのか、それもまた議論するのか。

今回、意見を上手く纏めたとは思うが、どう読んでも総論賛成としか書いてない。バックに団体がいるかと言えばいない。個人での総論。感想みたい。

出されているパブコメの中で、IGCJ のこのような意見にどういう意味があるのか。こういう論文調のものが、どういうインパクトを与えるのか。奥谷さんのところで、懸念や検討事項が出たとあるが、それはアクションが期待されるということ。何らかのアクションがなければ、それを無視したことになる。より良い方向に行くということになると思うが、ぜひとも仮定であれ対象であったとしても、出てくる結論が今議論されているものよりも、より良いものになることを念頭に置いた方が良い。場合によっては立場も明確にした方が良い。自分も JAIPA で頑張っているが、団体・企業・組織から何も出て来ない。そういう意味で、もう少し期待できるプロセスは別のところであっても良いと思うので。

A. IGCJ の成り立ちは、自分の理解だと（IGF のステークホルダーの分類での）テクニカルコミュニティを標榜している団体が、さまざまなステークホルダー／コミュニティも巻き込んで進めようとしているもの。何らかの立場を決めることがないというのはその通りだが、敢えて言えば、テクニカルコミュニティの立場が基調になっているのは事実かもしれない。

2.5. IDN TLD 文字列のルール策定活動について

- 時間が押したため、プレゼン自体は次回(IGCJ 10)の最初に延期
- 時間軸上で共有したい点だけ（スライド 7 のみ）今回紹介

A. 特に時間軸に追われていることはないが、中国、日本、韓国で、ドメイン名に使う漢字をどのように扱うかを調整している最中。

C. この話にも関わるが、文字コード・識別子の国際化全般にわたり、先日の ISOC-JP の勉強会で JPRS の米谷さんにお話しいただいた。Web で公開しているので、次回の IGCJ までにぜひそれを読んできて議論に臨んでいただきたい。